

I 研究主題

児童生徒の「人間力」の向上を図る小林ならではの教育活動の創造
～小中一貫教育における「こすもす科」の実践を通して～

II 主題設定の理由

現在、我が国は、様々な分野において改革の波が押し寄せ、教育界も例外ではない。とりわけ、国際的な学力調査（TIMSS、PISA）などにより明らかとなった子どもたちの学力低下の問題や、これからの国を支える若者の生き方の問題などは、解決を教育に期待する声が多い。中央教育審議会経過報告（初等中等教育分科会教育課程部会 平成18年2月）においても、子どもが自立した一人の人間として生きていくための総合的な力としての「人間力」の向上を図ることが求められている。

本県では、宮崎の教育創造プランが策定され、その具体的方策として第2期戦略プロジェクトが展開されている。戦略プロジェクトの目標として「県民総ぐるみで子どもたちの『人間力』を育む教育の推進」が掲げられており、その中で地域の特性を生かした多様な一貫教育の推進や社会生活を営む上で必要とされる態度や能力等の育成が目指されている。

小林市においては、「夢と生きがいをもった人を育てるまちづくり」を推進し、特に学校教育においては、「夢と元気と勇気ある小林教育」を基本目標として、小林に産まれたものが小林で育ち、小林で生きていく「地産・地育・地生」の教育を目指している。また、市内全小・中学校での小中一貫教育の導入に向け、小林市における小中一貫教育の基本的な考え方や方向性を示した小中一貫教育基本計画が策定されている。これまでも、二学期制の導入や「知・徳・体・食」のバランスのとれた児童生徒の育成、中学校区を核とした小中連携による取組などにより、学力向上や生徒指導の充実など様々な分野において成果が現れ始めている。本年度は、いよいよ小中一貫教育のスタートの年である。基本計画の目標にある、「自ら目標をもち、未来をたくましく生きぬく子どもを育成する」ことを目指し、各中学校区での取組が期待されている。

このような中で、本教育研究センターでは、平成18年度より、「人間力」の向上を目指し、小林市に誇りをもち、夢や生きがいをもって主体的に生きていこうとする力を育てることを目的とした教育内容の創造に取り組んできた。その新しい教育内容を「こすもす科」と称し、基本的な考え方を整理し、身に付けさせたい能力や指導項目の設定、単元の構築、教育課程への位置付け方など、本格的な実施の準備を行ってきた。さらに昨年度は、「こすもす科」を生活科及び総合的な学習の時間での実施に向け、「児童生徒用テキスト」「指導者用手引き」の作成や「評価の基本的な考え方」の検討を行い、市内全小・中学校での系統性・一貫性のある「こすもす科」の実施に備えることができた。そこで本年度は、「こすもす科」を実践する中で、課題を明確にし、それらを解決するための手立てを研究することにより、各学校での実践を充実させていきたい。具体的には、「こすもす科」における学習スタイルの構築と評価の在り方の検討である。また、「こすもす科」を幅広く理解してもらうために教職員や保護者に役立つ広報誌の作成にも取り組みたい。

以上述べたように、小林市の教育の実態を勘案しながら、新たに創造した「こすもす科」の教育活動を充実させ、定着させていく研究を進めることは、小林市の児童生徒の「人間力」の向上につながると考え、本主題を設定した。

Ⅲ 研究目標

小林市の児童生徒の実態や教育の動向を踏まえながら、「人間力」の向上をねらいとした小林ならではの教育活動を創造する。

Ⅳ 研究仮説

「こすもす科」の指導において、次のような手立てを行えば、児童生徒の「人間力」の向上につながる教育活動を創造することができるであろう。

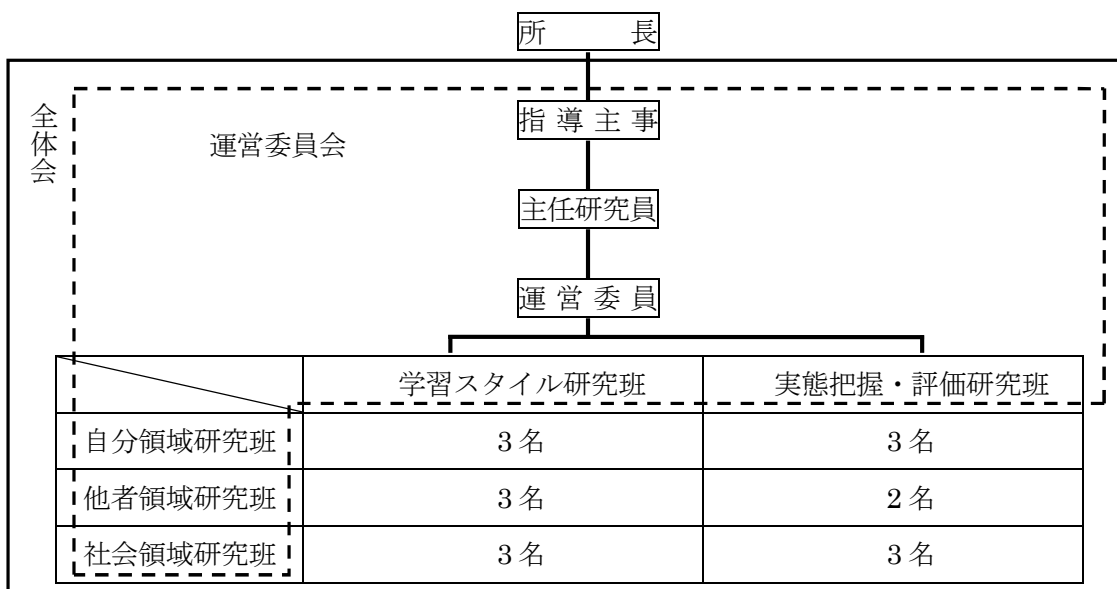
- ① 実践上の課題を明確にし、より効果的な指導方法を考え、具体化する。
- ② 児童生徒の変容を把握し、指導に生かすための評価の在り方を工夫する。
- ③ 「こすもす科」の指導内容や指導方法などの情報提供を行う。

Ⅴ 年次計画

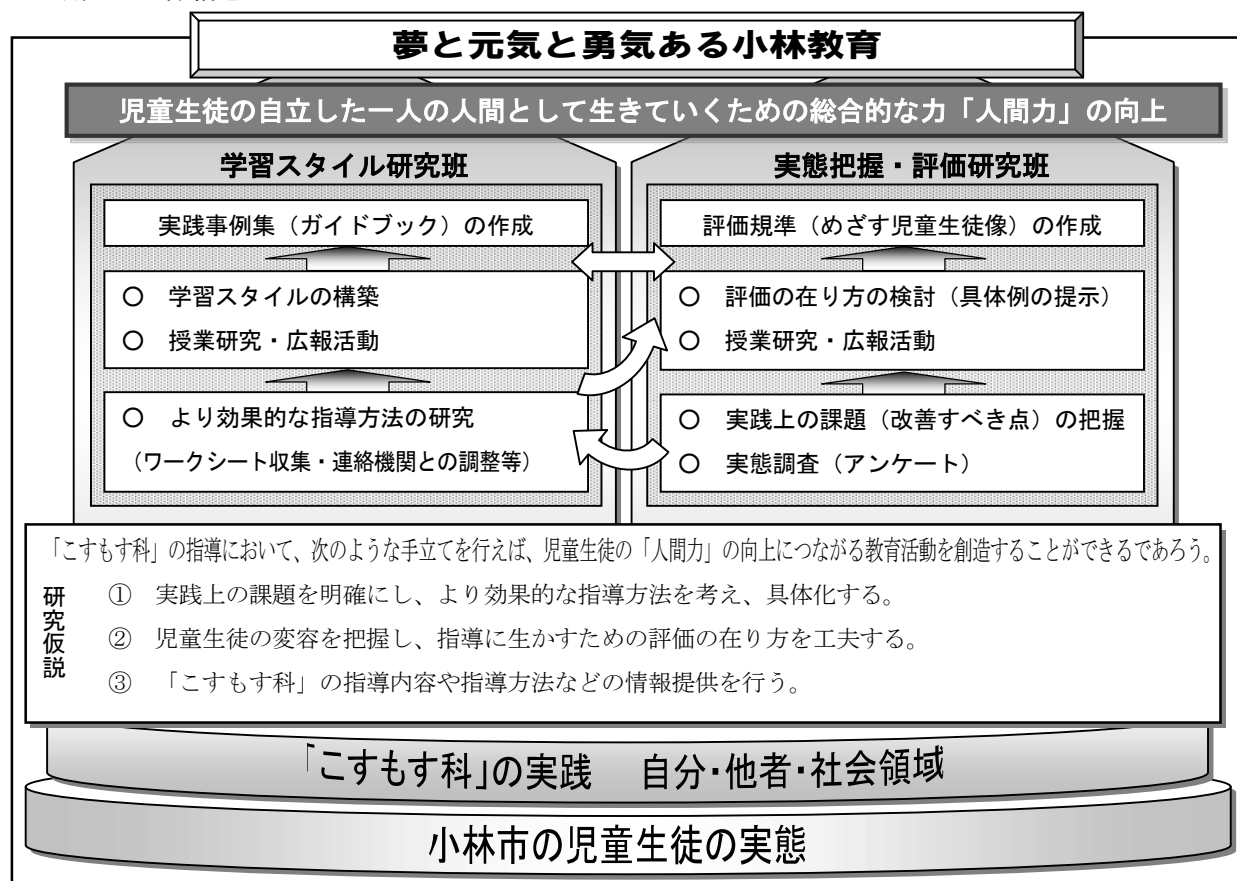
年度	小中一貫教育における「こすもす科」の研究
18年度	生き方教育としての理論構築、小林市民の生き方モデルプランの作成
19年度	「こすもす科」に求められる能力・態度の一覧表、単元計画の作成
20年度	「こすもす科」の総則、単元計画をもとにした「児童生徒用テキスト」・「指導者用 手引き」の作成、評価の進め方の検討
21年度	「こすもす科」の授業実践、学習スタイルの構築と実践事例集の作成、評価の在り方の検討と具体例の提示、広報活動

Ⅵ 研究の組織

研究班を学習スタイル研究班と実態把握・評価研究班の2つに分けた。さらに、授業実践に備え、「こすもす科」の領域である自分・他者・社会領域研究班を設け（1人が2つの研究班に属している）、領域の特性に応じた研究も進めることにした。また、各班のつながりを考慮し、全体会の他に、指導主事、主任研究員、運営委員、班長を中心とした運営委員会を設け、調整を図ることにした。



VII 研究の全体構想



VIII 研究の実際

1 研究主題について

(1) 「人間力」の向上

人間力戦略研究会報告書（内閣府 平成 15 年 4 月）では、「人間力」を「社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力」と定義している。中教審審議経過報告（平成 18 年 2 月）では、『『生きる力』と同じ趣旨のものであるが、（略）現実の社会で大人がどのように生き、そこでは何が必要とされるのかを見せることによって、学ぶことの意義を子どもたちに伝え、何のために学ぶのかという目的意識を明確にすることをねらいとしている。』とある。新学習指導要領（平成 20 年 3 月）においても、生きる力を育む理念を追求することが、更に求められており、「人間力」の向上は今後も学校教育において必要不可欠なテーマである。

(2) 「こすもす科」の実践

小林市に誇りをもち、夢や生きがいをもって主体的に生きていく力を育てるため、「こすもす科」を創設した。本年度より完全実施となり、実践を積み、成果を出していくことが今後の大きな課題となっている。「こすもす科」の目標は、次の 2 つの柱から成っている。

- ① 小林市民としての自覚をもち、自己の主体性・自律性や他者・社会との関係形成能力を身に付けさせる。
- ② よりよい人生を自ら創り出していくための豊かな人生観や望ましい価値観の基礎を養う。

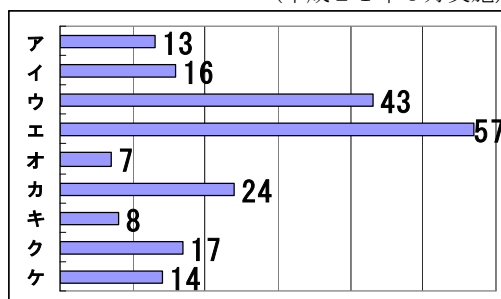
この目標を達成するための教育活動を展開することによって、「自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力を育成する」ことを目指している。

2 実態調査からの研究内容の焦点化

「こすもす科」の実践について、市内の小・中学校全教職員にアンケートを行い、年度当初の実践を通して明確となってきた課題や疑問等を把握し、その解決に向けて研究センターで取り組むべき研究内容の焦点化を図ることとした。なお、アンケートの視点は、「こすもす科」の指導方法に関すること、評価の在り方に関することとし、選択式及び選択理由の記述式で実施した。

	選 択 項 目	数値(人)
ア	テキストの活用の方法	13
イ	手引きの活用の方法	16
ウ	ホップ・ステップ等の各段階の指導方法	43
エ	教材・教具の工夫・充実	57
オ	掲示物等の作成	7
カ	1 単位時間の学習内容の配分	24
キ	指導案形式	8
ク	各単元の目標のめたせ方	17
ケ	3つの領域の指導の進め方	14

(平成21年6月実施)

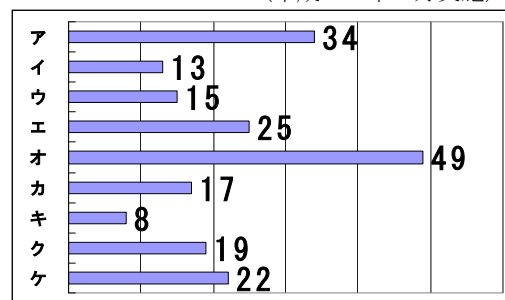


【資料1 アンケート「こすもす科」の指導方法に関する項目】

資料1の「こすもす科」の指導方法に関する項目の結果からは、主に教材・教具の工夫・充実やホップ・ステップ等の各段階における指導方法に関する課題や疑問等が挙げられた。本年度は、昨年度作成された児童生徒用テキスト、指導者用手引きを中心に指導している。教職員はアンケート実施の6月段階まで試行錯誤を繰り返しながら指導していたが、その中で適切な教材・教具の作成の在り方や提示方法、さらに各段階の指導方法に対する戸惑いを感じていることが明確となった。そこで、学習スタイル研究班においては、教材・教具や学習活動の活性化を図るための各段階における効果的な指導方法の在り方をめざして、研究授業等を通して「こすもす科」の学習スタイルを構築するとともに、市内小・中学校での実践事例を集約した「実践事例集」を作成し、教職員の指導方法に対する課題や疑問等の解決を図った。

	選 択 項 目	数値(人)
ア	8つの能力に対する評価規準の設定	34
イ	3つの領域における評価の在り方	13
ウ	1 単位時間の評価方法	15
エ	各単元の評価の在り方	25
オ	通知票における評価の在り方	49
カ	指導要録における評価の在り方	17
キ	高校入試等との関連	8
ク	効果的な評価の方法について	19
ケ	児童生徒の変容のとらえ方	22

(平成21年6月実施)



【資料2 アンケート「こすもす科」の評価の在り方に関する項目】

通知票や指導要録への評価形式（「特によいと認められる能力」及び「所見」）は昨年度の研究で示されていた。しかし、資料2の「こすもす科」の評価の在り方に関する項目の結果からは、実際にそれらの記入に至るまでの過程がオ・カにもあるように確立されていないことが挙げられた。そして、その過程においては、ク・ケから指導と評価の一体化を図ることが必要であると考えられる。また、「特によいと認められる能力」の定義や所見の記入内容等についても不安を感じていたことが伺える。さらに、評価規準等が明確に設定されていないために1 単位時間、各単元での児童生徒の評価が十分に実施できないという課題や疑問等についての意見も多く挙げられた。そこで、実態把握・評価研究班では、評価方法の一連の過程を明確にすることを目指して、まず「特によいと認められる能力」の定義や各単元における「めざす児童生徒像」を設定した。さらに、それをもとにした評価の実践、そして通知票及び指導要録への記入も見通した効率的かつ児童生徒の変容をとらえられる評価結果の蓄積可能な方法を研究した。

3 学習スタイルの構築

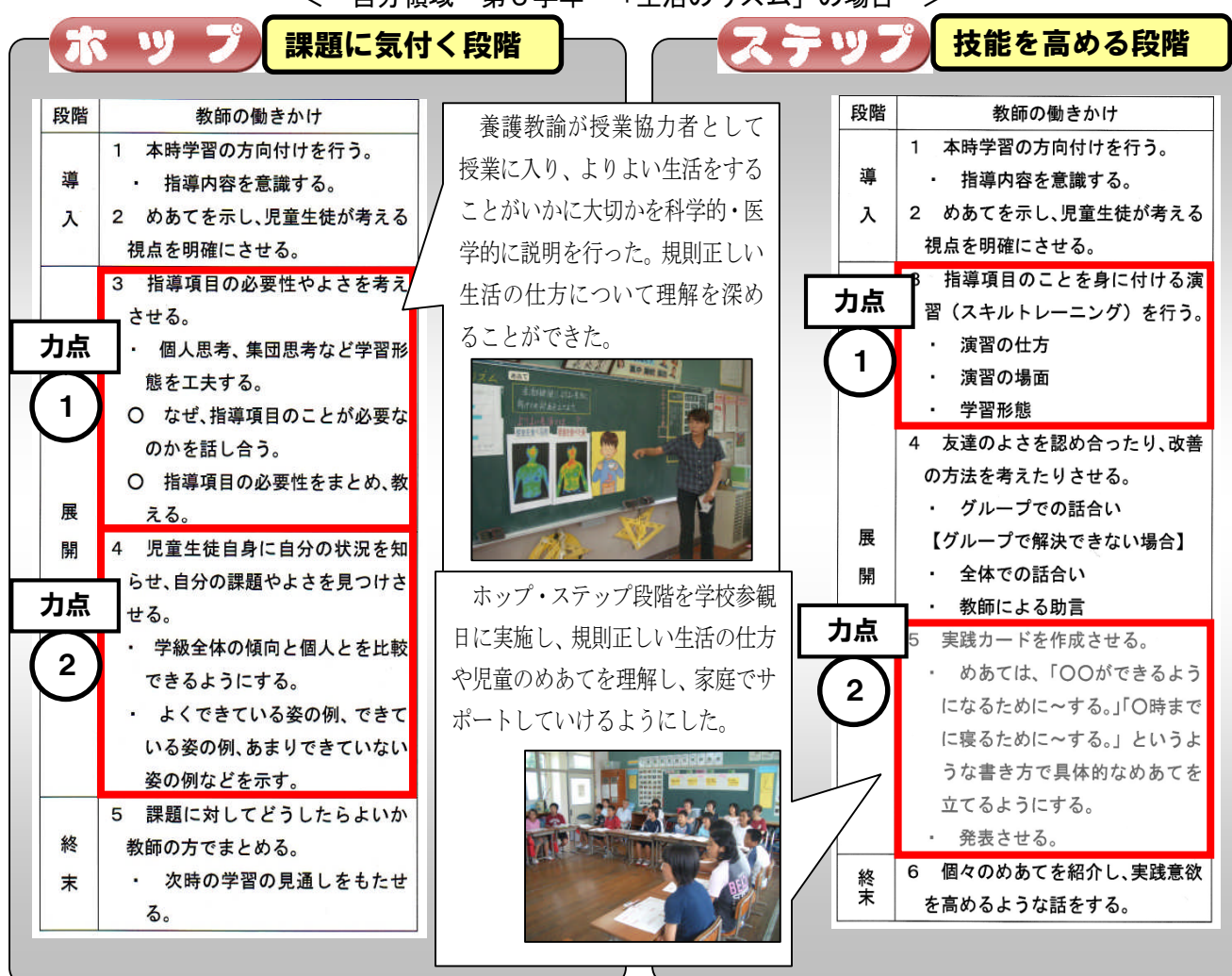
本年度は、自分・他者領域における4つの段階の指導方法について学習スタイルを構築していくことにした。自分領域においては、基本的な生活習慣を身に付けること、自立的な判断と自主・自律に基づいた行動をとることをねらいとし、自己育成能力や責任遂行能力を育成こととしている。また、他者領域においては、他者や集団での相互の人間関係を築き、民主的な集団を形成することをねらいとし、コミュニケーション能力や集団参画能力を育成することとしている。

そのために、以下の表のように各段階での指導の力点を定め、児童生徒が諸能力を身に付けられるように学習を展開していくことが必要であると考えた。

学習スタイル	問題解決的な学習			
4段階の名称	ホップ	ステップ	ジャンプ	ランディング
力点	①学習の必要性への気付かせ方 ②学習する内容に対する課題意識のもたせ方	①スキルトレーニングのさせ方 ②ジャンプ段階のめあての立てさせ方	①実践の場の設定（家庭との連携等） ②実践意欲を持続させるための手立て	①ジャンプ段階の振り返りの生かし方 ②新たな課題の解決と実践意欲の向上を図る手立て

このことを受けて、自分・他者領域における基本的な学習の流れを次のように設定した。

＜ 自分領域 第5学年 「生活のリズム」の場合 ＞



ジャンプ

日常実践・課題解決を行う段階

段階	教師の働きかけ
日常生	- 実践カードを用いて毎日振り返らせる。 - 日ごとに称賛、激励 - 変容を把握し称賛 - 振り返ることが難しい児童生徒には教師からの評価を伝える。 - 日常実践の様子をこまめに記録しておく。 - 家庭との連携が必要な単位については毎日実践カードを見、教師からの称賛、助言に活用する。

力点

1

2

実践カードについて

「規則正しい生活について」「健康な生活について」の2つのめあてを立てるようにした。評価については、「できた」「できなかった」の2段階で評価し、児童・保護者の感想を入れた。このような項目を実践カードに取り入れることで、実践への意識付けを図るとともに家庭とも連携して指導することができた。

生活のリズム改善計画書！

自分のめあて

＜「規則正しい生活」の面から＞

夜10時～11時までに寝る

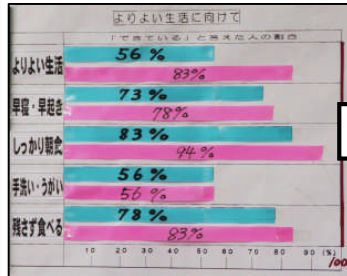
＜「健康な生活」の面から＞

手洗いうがいを忘れずにする

＜毎日の記録表＞ 評価→できた(○)、できなかった(△)

めあて	【規則正しい生活の面から】	【健康な生活の面から】
曜日	評価	評価
12日(日)	○	○
13日(月)	○	○
14日(火)	△	○
15日(水)	○	△
16日(木)	○	○
5日間を振り返る自分の感想	毎日が規則正しい生活で、手洗いうがいを忘れずに行っていた。	
5日間を振り返る保護者の感想	ルールが守られて、生活が定まってきたので、気持ちよく生活しているように感じた。	

ジャンプ段階での自己評価による児童の伸びを示すことで変容をつかませるようにした。



力点

1

展開

力点

2

段階	教師の働きかけ
導入	- 本時学習の方向付けを行う。 - ランディング段階を意識した話をする。 - めあてを示し、児童生徒が考える視点を明確にする。 - ジャンプ段階での自分の様子を振り返る。 - 自己評価、相互評価 - 保護者による評価 - 学級全体の傾向と比較することで、個人の自信や課題意識を高める。 - 新たな課題となる項目について改善方法を考える。 - 個人やグループで解決方法について話し合う。 - 形態を工夫する。
展開	【演習が必要な単位では】 - 指導項目のことを身に付ける演習（スキルトレーニング）を行う。 - 演習の仕方、場面、形態 - 友達のよさを認め合ったり、改善の方法を考えたりさせる。 - グループでの話し合い 【グループで解決できない場合】 - 全体での話し合い - 教師による助言
	- 日常実践できるように意欲付けを教師の方で行う。 - 実践カードにめあてを書かせる。

ジャンプ段階での自己評価をもとに、改善を必要とする項目については、みんなで話し合う場を設け、改善へのアドバイスとなるようにした。



4 より効果的な指導方法

(1) 「こすもす科」と他教科等との関連

「こすもす科」の学習内容は、児童生徒に「小林市民として必要な資質」や「課題として考えられる資質」等を小・中学校で育てていこうとするものである。このような内容の「こすも

す科」と関連する主なものは社会科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間の学習内容が考えられる。また、その他の教科、領域においても学習の学び方や学習習慣といった学習を支えるものも含まれている。

そこで、「こすもす科」と関連し、相互補完し合うという考え方に立って、「こすもす科」を充実させていくことを考えた。そのために、市内の

教職員の理解を深めるために資料3のような関連イメージ図を広報誌で伝えることにした。

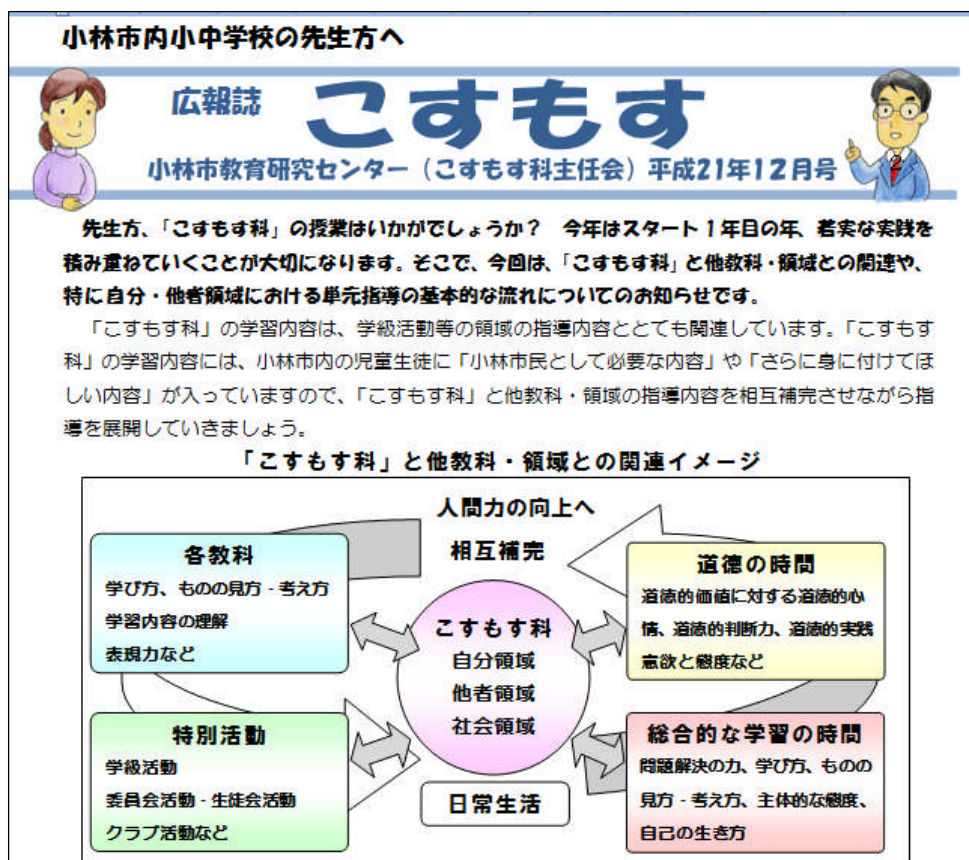
(2) 関係機関との連携

関係機関との連携については、それが必要となる単元の洗い出しを行うこと、連携の内容を整理すること、本年度の実践状況をつかみ、課題の改善を図ることの3つに取り組んでいくことにした。

まず、関係機関と連携が必要となる単元の洗い出しでは、情報提供としての機関、交流としての機関、実践の場としての機関等の目的から施設や人材を含めて考えていった。

次に、連携の内容の整理では、関係機関との連携の内容や事前連絡事項や実践後の配慮などを分かりやすく示すことが必要であると考えた。そこで、資料4のような形式で教職員に示すことにした。さらに、活動協力依頼書等が必要な場合もあるため、依頼書の様式を示すことにした。

最後に、本年度の実践状況をつかみ、課題の改善を図ることでは、関係機関からの要望や意見を把握し、次年度の取組をより効果的に実施できるようにするために、課題の改善へ努めることにした。



【資料3 教職員向け広報誌「こすもす」12月号】

学年	小5
単元	私は保育士
関係機関	校区内の保育園・幼稚園 (校区外・・・市のバス利用)
連携の内容	・ 保育園についての学習 ・ 保育士体験
時期	各学校で設定
事前連絡	必要（日程調整「活動協力依頼書」）
お礼状	必要

【資料4 関係機関との連携事項】

- 同日にできるだけ授業を設定し訪問回数を減らしてほしい。1日内の回数は何回でも大丈夫である。
- 1回の授業で60人程度までは大丈夫である、場所は体育館でも構わない。
- 事前に質問事項を連絡してもらえると、よりよい説明や回答ができる。
- できれば虫を実際に観るまでに余裕のある5月中に授業を行いたい。

【資料5 商工観光課からの要望】

小学3年の「小林たんけん隊Ⅰ」は、ホテルについての学習であり、商工観光課との連携が必要である。そこで、資料5のように本年度実施による課題を把握し、商工観光課からの要望についても配慮しながら次年度の実践につなげていくようにした。小学5年の「私は保育士」は、保育園・幼稚園についての学習や保育士体験を通して勤労観を育む学習である。資料6のように、本年度の実践における各小学校区内の保育園・幼稚園の受け入れ状況等を把握し、次年度、スムーズに単元指導にあたることができるように本年度の実践状況をつかむことにした。

小学校名	児童数	保育園・幼稚園名	受け入れ可能人数	連絡先	備考
小林小	109名	中央保育所		23-0000	
		小林乳幼児保育園		22-0000	
		小林幼稚園		23-0000	

【資料6 各小学校区における保育園・幼稚園一覧の一部】

次年度に向けて、資料7の視点で本年度の実践を受けて改善を図っていくことにした。同様に、中学2年の「夢を探そう」は、将来の夢を考えていく学習である。この学習では職場体験学習も含まれている。本年度より全中学校第2学年で実施することに統一したため、職場体験の受け入れ事業所が複数校で重なったり、受け入れ可能の人数を超えたりして不具合が生じた。その対応を今後、教務主任会と連携しながら考えていかなければならない。

- ① 各小学校区における保育園・幼稚園の確認

② 受け入れ先の修正・付加

③ 受け入れ可能な人数の確認

④ 連絡先の確認

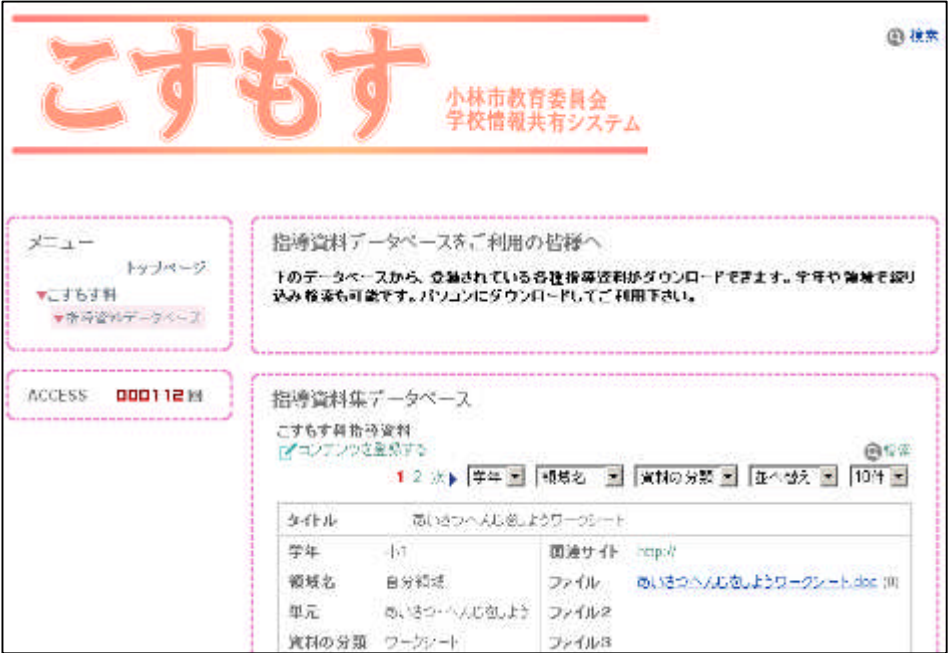
※ 今後、保育園・幼稚園側からの要望などを把握する。

【資料7 改善を図る視点】

5 実践事例集の作成

小林市SSC（小林市スクールサポートセンター）と協働して、「こすもす科」の実践事例を資料8のように市内イントラネット上のホームページで配信していくことにした。

ここで載せる実践事例は、各学校で実践した研究授業の指導案、授業で活用した資料、ワークシートの3点である。ホームページ上では、「学年」「領域」「資料の分類」で検索



【資料8 小林市SSC「こすもす科」ホームページの画面】

すると、必要な指導資料を絞り込むことができ、自由にダウンロードが可能である。また、だれでも検索しやすいように、できるだけクリック数を減らすなど、簡単な操作で活用できるような工夫を行った。

6 評価の在り方

評価の在り方を研究していく視点として、「指導と評価の一体化」、「効率的かつ小中学校9年間の変容をとらえられる蓄積可能な方法」を目指して、以下の一連の評価の在り方を明確にすることができた。（※①～⑤が評価の流れ）

- ① 各学校で当該学年の学習する単元名を入れた評価一覧表を作成する。（③参照）データとして残すことにより、小中学校9年間の児童生徒の変容を検証することも可能となる。
- ② 各単元の指導を実施する。
- ③ 単元終了後、本年度全単元において作成した「めざす児童生徒像」をもとに、「その単元で身に付けるべき能力」の達成度を評価一覧表に「○又はノーチェック」で評価していく。

めざす 児童生徒像	＜ 小学校6年「公共のマナーⅠ」の場合 ＞ ○ 電車やバスの中で、周囲の方々に迷惑がかからないように、大きな声での私語をつつしんだり、座席に正しく座ったり等、静かに乗車することができる。 ○ 図書館やホテルでは、他の利用者のことも考え、声の大きさや歩行の仕方、利用物の不可の判断、後片付け等、その場のルールにそって行動することができる。
↓	※ 通知票及び指導要録の評価に含まれる「特によいと認められる能力」の決定

【「特によいと認められる能力」の選択方法】

能力	自己育成能力				責任遂行能力	コミュニケーション能力	集団参画能力		環境保全能力	文化的活動能力	地域貢献能力	将来設計能力	特によい能力
単元名	公共のマナーⅠ	身だしなみ	物の貸し借り	安全な行動Ⅱ	自分の役割Ⅲ	自分の気持ちや考えを伝えようⅣ	リーダーとして必要なことⅤ	みんなで行ってみようⅥ	小林の3H2O			ライフ・夢プラン	
児童氏名													
A児	○↑		○		○		○		○			○	自己育成
B児		○				○				○			コミュニケーション
C児					○								責任遂行
D児				↑									自己育成
E児													責任遂行

1 記入方法について

- 教師が各単元終了後に、単元の「めざす児童生徒像」をもとに、達成している場合にその能力に「○」を付けていく。
- 次の場合は、達成していない場合でも、「↑」を付けていく。（「めざす児童生徒像」を達成し、なおかつ以下の場合は「○↑」となる）
 - ・ 単元の活動で、児童生徒が特に意欲的に取り組み、充実した活動の姿が見られた場合。
 - ・ 単元のホップからランディングと学習を進めていく中で、児童生徒に大きな成長が見られ、その単元でねらいとする能力の伸びが顕著であった場合。

2 「特によいと認められる能力」の選択方法について

- 「A児」は、「自己育成能力」に最も「○」がついているため、通知票及び指導要録の「特によいと認められる能力」は「自己育成能力」が妥当である。
- 「B児」は、それぞれの能力で「○」が1つずつのため、児童生徒のワークシート等での自己評価との関連又は教師がその単元で最もよかったと判断した能力とする。
- 「C児」は、「○」が1つのため、その能力が「特によいと認められる能力」となる。
- 「D児」は、「めざす児童生徒像」を達成した単元がないために「○」がない。しかし、「↑」の付いた単元があるため、この場合は、「個人内評価」の視点から、最も高いと判断できる「自己育成能力」となる。
- 「E児」は、「○」も「↑」もないため、この場合は「E児」の自己評価で、本人が最も高い評価をしている単元の能力を「特によいと認められる能力」として評価する。そのため、児童生徒のワークシート等での自己評価を蓄積していくことが必要である。

- ④ 通知票及び指導要録の評価に含まれる「所見」を作成する。

- 「所見の3つの構成要素」を基準として、所見を作成していく。

「単元名」	+	「活動の様子」	+	「変容の姿」
↓				
○ 成長が見られた活動 ○ 特に活躍が見られた活動 ○ 本人の自己評価でがんばりが認められた活動（個人内評価の視点）				
↓				
○ 評価は基本的に「ランディング段階終了後」の時点で行う。 ○ 当該単元の「めざす児童生徒像」の文言も参考にして記入していく。				

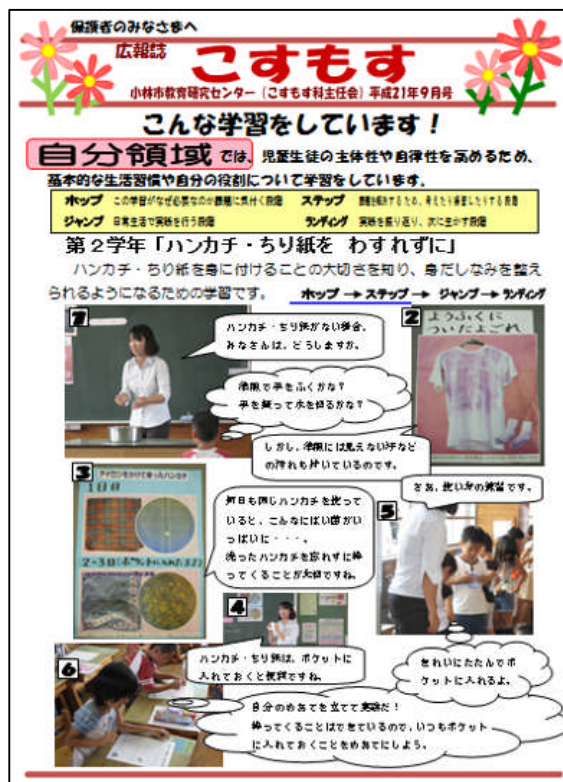
- ⑤ ③・④を合わせて、通知票及び指導要録に記入していく。（※ ③の一覧表の「A児」の場合）

能力	所見
自己育成能力	○ 「公共のマナーⅠ」の学習では、「公共」の意味を理解し、グループで協力して修学旅行で利用する公共施設でのマナーについて、具体的に考えて発表し、学級の共通理解事項を設定することができた。修学旅行でのホテル利用では従業員の方へのあいさつを主体的に行ったり、部屋の後片付けを率先して行うなど、ルールに沿った行動をとることができた。

Ⅱ 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 「こすもす科」における学習内容を効果的に指導するための基本的な指導過程を構築するとともに、実践された指導案やワークシートを収集し、SSCのホームページや実践事例集としてまとめることができた。
- (2) 「こすもす科」における評価の在り方を検討し、通知票や指導要録への記入方法を具体的に示すことができた。また、9年間を見通した各単元の「めざす児童生徒像」をまとめることができた。
- (3) 3つの領域でそれぞれ授業研究を行い、指導方法の改善や児童生徒用テキスト・指導者用手引きの改訂の方向性を見出すことができた。
- (4) 保護者や教職員へ向け、それぞれ5回の広報誌を発行し、「こすもす科」のねらいや指導方法・実践例などを紹介することができた。



【資料9 保護者向け広報誌】

2 今後の課題

- (1) 「こすもす科」の実践をさらに重ね、より効果的な指導方法の研究をしていくとともに、児童生徒用テキスト・指導者用手引きの改訂に向けた準備をしていく必要がある。
- (2) 教職員や保護者、各関係機関に対して、「こすもす科」の更なる理解を得るための手立てが必要である。
- (3) 「こすもす科」の学習を通して、児童生徒がどのように変容したのかについて、把握するための手立てを今後も工夫する必要がある。

○ 参考文献

- ・『小学校学習指導要領』大蔵省印刷局
- ・『中学校学習指導要領』大蔵省印刷局
- ・宮崎県教育委員会『宮崎の教育創造プラン～宮崎ならではの教育～』
- ・小林市『小林市総合計画』
- ・小林市教育委員会『小林市教育推進プラン（平成18年度～22年度）』
- ・小林市教育委員会『小中一貫教育基本計画』

○ 研究同人

所 長	佐 藤 勝 美 (小林市教育委員会教育長)	研 究 員	郷 田 良 太 郎 (小林市立東方小学校 教諭)
指導主事	西 田 幸 一 郎 (小林市教育委員会学校教育課指導主事)	研 究 員	金 丸 昭 (小林市立三松小学校 教諭)
指導主事	盛 満 政 仁 (小林市教育委員会学校教育課指導主事)	研 究 員	赤 崎 好 次 (小林市立幸ヶ丘小学校 教諭)
主任研究員	金 丸 克 也 (小林市立南小学校 教頭)	研 究 員	森 田 和 子 (小林市立須木小学校 教諭)
運営委員	黒 木 修 志 (小林市立南小学校 教諭)	研 究 員	高 岩 恵 子 (小林市立鳥田町小学校 教諭)
班 長 (学習)	岩 切 隆 人 (小林市立西小林小学校 教諭)	研 究 員	桑 原 聡 子 (小林市立小林中学校 教諭)
班 長 (評価)	阿 部 泰 宏 (小林市立小林小学校 教諭)	研 究 員	村 中 田 学 (小林市立細野中学校 教諭)
班 長 (自分)	杉 田 知 穂 (小林市立永久津小学校 教諭)	研 究 員	吉 村 政 文 (小林市立西小林中学校 教諭)
班 長 (他者)	川 野 幸 三 (小林市立内山中学校 教諭)	研 究 員	吉 永 理 恵 (小林市立永久津中学校 教諭)
班 長 (社会)	黒 木 良 一 (小林市立東方中学校 教諭)	研 究 員	日 高 由 文 (小林市立三松中学校 教諭)
研 究 員	下 野 雅 代 (小林市立細野小学校 教諭)	研 究 員	曾 山 正 人 (小林市立須木中学校 教諭)